

日本経済新聞

インタビュー

決断とその後

井上義行元首相秘書官「批判全部かぶる気持ちだった」

(1月18日付朝刊政界面関連インタビュー)

(1/2 ページ)

2015/1/18 3:30

日本経済新聞 電子版

安倍晋三首相は2006年に第1次内閣を発足させると、政務担当の首相秘書官に内閣府職員だった井上義行氏を起用した。政府・与党との様々な調整にあたる政務担当は首相秘書官の中でも筆頭格で、長年連れ添った議員秘書から就くことも多い。官僚から首相政務秘書官を起用する功罪とはなにか。現在は参院議員で新党「日本を元気にする会」で国会対策委員長を務める井上氏に振り返ってもらった。



[画像の拡大](#)

現在は「日本を元気にする会」の国会対策委員長を務める井上義行参院議員

——出会いは内閣官房副長官時代でした。

「安倍晋太郎さんの息子さん、という印象しかなかった。私は当時、副長官付といって、いわゆる事務の秘書官。安倍さんからは拉致問題をやってほしいと言われた。普通は拉致は外務省が担当する案件だったから、すぐに外務省が内閣府にクレームをつけるなど、大変だった」

——官房長官秘書官を経て首相秘書官に就きました。

「官房長官の秘書官をやっているときまでは安倍さんだけを見ていれば良かったが、政務担当の首相秘書官は党務も入ってくる。いわゆる選挙だ。政府関係の話はそんなに変わらないが、選挙となると分からない部分があった。選挙に負けたら生活を失うということが実感として分からない。選挙に出て初めて分かったこともある」

——なぜ起用されたと思っていますか。

「たぶん、全員が離れても井上だけは残っていると考えたのではないかと思う。普通の役人は政治家と一定の距離を保つ。出世への影響を考えて政治的な色をつけたがらない。でも、僕は気にしなくて、安倍さんからすると議員秘書と同じように接することができたのではないか」

——官僚出身者が首相の政務秘書官に就くことをどう考えますか。

「官邸はある程度、経験がないと回せない。少なくとも1年くらいたたないと、どこのボタンを押していいか分からない。その点、自分は20年の官僚生活のうち半分以上は官邸にいたので、経験値である程度こなせる部分もあった。一方で、官僚は時として選挙を意識しない習性がある。政策を押し通そうとして、その結果、政権が倒れる場合もある。選挙という感覚は官僚には分からない」

「政治家になって思うが、政務秘書官は秘書室長という肩書にして、政治家が務める方がうまくいくのではないか。官僚だと嫉妬される。どうせ嫉妬されるなら政治家のほうがいい。政治家は選挙を意識するから、官房長官や自民党議員とも改革を進めるスピードなどについて同じ目線で議論できる。しかし、官僚出身だと他の官僚からは嫉妬されるし、政治家からも『政治家じゃないのに政治家の発言をしている』と嫉妬される。2度とやりたくないね」

——第1次安倍内閣の支持率が低下するにつれ、井上氏への批判も強まってきました。

「どうして耐えられたのか、と言われる。安倍さんが首相になる前に、安倍さんと私で小泉（純一郎）さんにあいさつにいった。そのときに言われたのは『これからはいろんな人からの嫉妬の声が来る。だけど自分を信じてやれ。おれは総理大臣になってから携帯を持つのをやめた。マスコミのオフレコ・メモも読むのをやめた。週刊誌も読むのをやめた。自分を信じるだけだ』と。それを忠実に守った。外野の声を封印した」

——井上が首相に会わせない、という不満も当時聞きましたよ。



第1次安倍内閣当時、首相官邸の秘書官室で（井上事務所提供）

「安倍さんの病気もあった。点滴などもあって、どう考えても時間が足りなかった。もう一つは当時、霞が関の局長クラスが各省庁と調整しないまま、首相のところに持ってくるのがあった。昔の首相と今の首相は違う。首相の時間の半分は外交だ。残りの半分以上を国内と選挙に振り向ける。その中で、改革なら改革に集中させたい。通常の業務は官房長官まででやらないといけないと思った。そこで自分が全部（批判を）かぶることにした」

——今の安倍首相をどう見えていますか。

「第1次内閣で捨て身になって一定の実績を残せたから復帰できたと思う。でも、今の首相はもう少しやったほうがいい。封印している感じがする。アド

バルーンは上げるけれども、敵をつくらないからぶつからない。第1次内閣であつた捨て身の部分を半分でも見せてほしいと思う。自分はたたかれ過ぎたが、思い切りたたかれる人がいなくなったのは寂しい」

——長期政権も視野に入っています。

「今の内閣は僕が背負っていたものを、菅義偉官房長官がやってくれている気がする。もう一つは年齢。当時、安倍さんが52歳で、各省の局長以上の方は年上。事務次官から見たら子供だった。安倍さんも還暦を迎えて次官と近い年齢になった。霞が関の目線も変わったのではないか。僕もあのとき43歳で、霞が関からすれば小僧だから。政務秘書官の今井（尚哉）さんも嫉妬を気にせずに、やってほしい」

（聞き手は中山真）